



昭和48年(1973年) 2月号(No. 332) 社団法人 日本山岳会 (J. A. C.)

目次

Table of contents listing articles such as 'ある日カナダの旅' by 三田幸夫, 'ある復活会員の速懐' by 周布光兼, and '山と蝶のものがたり' by 春田俊郎.

ある日カナダの旅

三田 幸夫

去年の九月半ば、カナダ・ロッキーの旅を終えたバンクーバーでの最後の日、ホテルの受付に同地の有力紙プロビンスの編集長シャーマン氏からのメッセージが待っていた。今夜夕食を一緒にしたいが都合はどうかという伝言であった。

ちょうどその晩はフリーにしてあったので早速電話でその旨を連絡する。明る内にシャーマン氏が車で迎えにくる。肉中背のきびきびした新聞人らしい紳士で、前から知っているような親しさである。案内されたユニバーシティ・クラブは海を見下ろす瀟洒な建物で、広いロビーには既に現カナダ山岳会の名誉会長ミセス・マンデーと、前支部長のミス・スミスが待っていた。四角張った挨拶は抜きにして、四人がランとしたロビーの隅のソファに落付く。飲みものは何にしなしようというところで僕がシェリーを所望すると、後の三人も同様で皆辛口に賛成だ。大き

なグラスにシェリーがなみなみと注がれ、リラックスした会話が流れ出して賑やかになる。ミセス・マンデーは、一九二〇年代の後半、当時問題になっていた沿岸山系の謎の山、ワデントン(四〇四一m)の発見、登路の開拓等について今は亡き夫君と共にパイオニア者であった。さすがに八時を過ぎると、大きな窓硝子を通して眺めた港の海も暗くなり、更に話題を豊富に賑やかにしていった。さすがに八時を過ぎると、大きな窓硝子を通して眺めた港の海も暗くなり、更に話題を豊富に賑やかにしていった。

シャーマン氏は、その近著『雲上の歩行者』に見られるように、カナダ山岳会でも中核的な存在で、さすがに登山界に對する見識も広く、かつ新しい。日本に続いてエベレスト南西壁を試み

一九七一年の国際登山隊の成果について論じ、その寄合世帯の難しさを批判していたが、お互いに共感するところがあった。

話は日本山岳会やカナダ山岳会の現状におよび、更にお互いの知人の近況にまで話が広がっていく。その頃頭が漸く隣の食堂に移されたが、来客は僕達の他に一組だけという閑散だったが、雰囲気は愈々温かく親しく弾んでいた。支配人推奨の蟹料理が仲々美味で、土地ものだというワインが食欲をそそり、更に話題を豊富に賑やかにしていった。さすがに八時を過ぎると、大きな窓硝子を通して眺めた港の海も暗くなり、更に話題を豊富に賑やかにしていった。

一九二五年の七月、僕はアルバータ登山の帰途、バンクーバー支部のカーター君の案内でその山腹にある山岳

Table of contents for the second part of the magazine, including '山と蝶のものがたり' by 春田俊郎, 'アンナプルナ南壁' by 川上 隆, and '現地支部長会議の件' by 北海道支部.

会の小舎に泊まってキャメルに登った。あの小舎は今どうなっているでしょうと聞くと、ミセス・マンデーは、さあ?と云ってシャーマン氏達を顧みる。だがその小舎の現状については誰も知らなかった。その周辺が近年大バンクーバー市水道の水源地区に編入され、一般ハイカーの立入りも大分やかましくなったとの事だ。

その時の山行は僕達を歓迎の意味でのハイキング程度。飯漕ぎが少々厄介だったが若い女性三人を含めた十名の一行は終始仲々賑やかで楽しかった。カーター君は小型経緯儀を携行し、見晴しの好い地点で時々付近の地形を測量していた。この測量によって作製された沿岸山系の地図が進展して後年カナダ政府に採用されたということを僕はインドで知られた。

僕は清潔で食器類も一通り揃っていて、夕食後は馬の旅でカウ・ボーイから教わった「ロング・ロング・トレイル」という当時流行っていた唄を皆で合唱した。寝室は狭いのでお嬢さん方に提供し、男性七人はあけつぷりげのウェランダに着たまま雑魚寝をした。翌日の岩登りは面白かった。最後の

二m程の垂直の岩がつかると手がかりがなく、岡部が岩の下にふんばり肩を貸してお嬢さん達を押し上げた。そのお嬢さんの一人の襦袢が飯漕ぎの途中大きく裂け、背中が丸出して時々滑っては岡部の頭を踏みつける。仲間が面白がって弥次るたびに岡部が嬉しそうな顔で仲間に応酬する。その時の情景が愉快で今でも目に浮かぶ。その時のお嬢さん達の一人が現在のカーター博士夫人である。カーター君は終戦直後一九四六年の春来日し、度々会ったが奥さんは連れて来なかった。その時の話に、長男は既に高校生で背丈は自分より高く、例の岩も彼は自分でホルドに手が届き他人の助けを借りないでも独りで登れるようになった、と嬉しそうだったことを記憶している。

僕は今度のカナダ旅行ではカーター夫妻とその息子さん達にバンクーバーでは是非会いたいものと出発前に旅程を詳しく知らせた。

日本出発の直前、カーター君から航空便の長い返事が届いた。それによると、同君夫妻は、僕がバンクーバーに着く前日、北極圏に近い地域に小さな冒険旅行を試みるべく出発することになったのである。誠に残念だが再会の機会はないだろう。だが自分達は車でジャスパーを経由してエドモントンまで行き、そこから飛行機でマッケンジー川の河口近くまで飛ぶ。だからジャスパーでうまく同時に行きあう機会もなきにしもあらずとも書いていた。

僕は事前に予約してあった九月五日午後五時半バンクーバー発カルガリ行の急行列車に乗り込んだ。夜間は二段ベッドに変わる二人宛の広い座席が廊下を隔てて向かい合い、仲々快適である。僕にとっては四十七年ぶりのC.N.R.大陸横断鉄道だが、たいして変わりはえもしないものの列車中央部の展望車は広い座席の上が大きな硝子張りのド

ームになっていて、ロッキーの山々とその裾に広がる広漠たる原野と森林、そして碧い水を湛えた湖水等を心ゆく許り眺めることができる。夜間窓外の景色を見飽きた幾組かの人は階下のバーで静かに酒を楽しんでいる。

列車は翌日刻の午前十一時一寸過ぎにジャスパーに着いた。普通リブラットホームはなかったが、近くに小綺麗な駅舎が建っていた。雲は低く小雪もばらつき、仲間の一人が「大分寒いな、耳が痛いよ」と言っている。皆早く駅舎のスターヴに駆け込みたいようだった。セーターやアノラックを出したりごたごたの最中、突然遠くの方から長身のカーター君が僕達のグループに近づいてきた。夫人も一緒だ。三人肩を抱き合せて久しぶりの再会を喜んだ。夫妻の話しによると、僕達が何かの間違いで、前日の列車で着くかも知れないという偶然を期待して車を飛ばし、ジャスパーに一泊して待っていたのだという。だが彼等の出発の時間までにはあと小一時間きりの余裕しかない。お互いに余り変わっていないねえと言いつつ合いながらも夫妻の頭は二人とも真白になっているのに気付く。それでもカーター夫人の顔には時々キャメル峰のお嬢さん時代の面影が浮かんでくるのを見逃せなかった。

僕に見せて嬉しそうだった。そしてこんな地図も今となってはアメリカさんに興味がないからいくらでも手には入っている。国への好いお土産になるよといった。そんな地図の話から日本アルプスの代表的な槍穂高に是非登りたいからと同行を求められたが、当時僕は仕事で忙しかつて東京を永く離れられない。そこで矢張り同君を熟知の横さんにお願ひして快諾を得た。ちょうど大町に疎開していた横さんは古い案内の林道を雇い入れ、助手に慶応山岳部の山田(後のヒマルチニリ隊長山田二郎)、大蔵の両君を助手に加え愉快な穂高槍の縦走を試みている。この紀行も仲々面白いが詳細はカーター君記述の「大戦後の日本における登山」(一九四七年カナダ山岳会年報)に譲ることにしよう。

現在のカーター君は既に役所を引退し、ウエスト・バンクーバーの丘陵一〇〇フィートの高台に家を建て、そこから晴れた日は二〇マイル離れた北米ワシントン州のオリンピック連山がよく見える、長男のフレッドには好くいつくれているから帰りに是非立寄ってくれとのことだった。

五年程前、夫妻はカナダ北東の山域(現在名ガールパルディ・パーク)にあるニール峰(八三三〇フィート)の第三登に成功している。道路から非常に離れたので途中ヘリコプターを利用して帰路はベースを要したという。その辺はカーター君が一九三三年地図作製のため測量した地域で、政府はそれを記念して一九二九年、主峰をニール、そこから派生している二本の水河にカーター氷河と命名した。彼のフルネームはニール・カーターなのだ。

僕達のその日のホテルは駅から直ぐ近くのジャスパー・インというモーテルが予約されていた。自炊以外の食

事は近くのレストランでとることになっているが、部屋数も多く、各部屋の設備も至れり尽せりで、なまじっかの豪華なホテルよりも気楽で、この二晩の泊りに皆満足した。

荷物を解き広い居間に落ちついて一望していると、事務所から連絡で、この商工会議所が発刊している雑誌の記者が明朝僕を訪ねてきた。要件は一九二五年の僕達のアルバータ遠征当時の事情やジャスパーについての今昔の印象等を伺いたいことが目的で、カメラマンも同行するからという伝言であった。

カナダのこと

田口二郎

会報三三七号に織内君が楽しげなカナダの旅をさらりと便りしているが、国立公園のバンフで私と出くわしたところにも触れいられた。藤島老夫妻らのご一行であったが、一方私は商売の連れ合いたちとバンフのホテルに着いたその足で夏シャツ一枚ですぐさま町の小さな支那料理屋におしかけたところ、ツイードに身を包み静かに食卓についているご一行にぶつかり、たちまち藤島さんのお口から、自費の旅でレジャーカードで気取ったスケージュールを組み、好きな時に好きな場所泊まり、とイキングをしたり釣りやしたり、とまことにうらやましい話を聞かされてしまった。長老の藤島さんからは、お二郎、いつまで渺たる動機にあくせくしているのか、と叱られっぱなしの大鬼門であるので、バンフの奇遇は同老の毒舌に絶好の好餌を与えたに違いない悪い感じがするのをお先に失礼して若干の見聞を記しておこうというのが

小文の魂胆である。

さて私のカナダ旅行だが、例によって勤めのひとつであり、がちりと予定は仕組まれアポイントも当方の都合で変えるわけにはいかないベルトコンベヤーに乗っているようなゆとりもない旅。バンフに赴いたのも勤め先がカナダ西部で油井管を売っているので、顧客である同地の石油業者をカルガリ市で一堂に招き、その翌日はほど遠からぬ国立公園で親善ゴルフを行なう恒例の義務を果たすためだった。

繰り返すようだが、自費での気取った旅の楽しさを知っている者にとっては社用の海外出張は本当に味くないものだ。時に年配になると旅の日が重なるに従い気分も重たくなってくる。といって面白くないことはかりではなかった。バンフのゴルフは参加者が多く主催者側はのんびりしていられたかったが、ゴルフそのものは賞味あふれたものだったとお伝えしよう。といって自身のゴルフのことを申し上げているのではない。知る人ぞ知るところが一応念のため。賞味あふれたものだというのは、あの四方をがちりと高い岩壁の山で巡らした、まるで欧州アルプスのようなゴルフ場のことだ。このコースでは、いつどこに行んでも風景に見あきることがない。まず一番の出だしが素晴らしい。

私達が投宿した BANFF HOTEL SPRING HOTEL は、堅牢な石造りで立派な木材をインテリアにふんだんに使ったお城のようなホテルだったが、夏場の従業員はアルバイトに来ていたカナダの大学の金髪の娘たちが大部分で、彼女たちの健やかな雰囲気から包まれて朝食をとり、長い下廊下を伝って崖の端に立つとそこが一番のテイ・グラウンドだ。眼下にはおそらく水河に端を発している清冽な水が走っている。そして対岸には針葉樹の

ネルギー不足が危惧されており海外にそれを求めているが、今のところマッケンジー河口の大量の天然ガスが南方に敷かれる長いパイプラインを通じて最も有力視されている。たまたま私の勤め先がカナダ向けのパイプラインの輸出業者の一つであるという誠に都合の良い事情を口実にして、私はさもなくば理由がなかつたイヌヴィックへこれまた息をつかせない素晴らしい空の旅を満喫出来ることになった。小さなプロペラ機だろうという私の単純な予想を裏切って、カナダの友人と二人でエドモントンで乗り込んだエア・カナダの飛行機は立派なジェットであり、しかも四十ばかりの席はいっぱいだった。エドモントンから中途の二カ所でのストップオーバーを含めて終点のイヌヴィックまで六時間。第一カ所はエロ・ナイフというカナダ有数の金山とウラン鉱のある所、第二カ所はノルマンス・ウェルといういかにもマッケンジー河に沿う石油ベルトの上にあるのにふさわしい名前の場所。

十八世紀末のカナダの探検家マッケンジーは、初めグレイト・スレイブ湖の周辺を踏査したが、そこから流れ出る大きな河に気がついて小舟に乗って一六〇〇マイルを降り、その際に、世界一退屈な河だと彼は嘆いたと伝えられる。全くその通り、悠々と流れるその河容を下に眺めて北に飛ぶと、大地の色彩が緑から青へ、青から褐色へ段々色あせてくる。地肌も針葉樹の密林が北に行くに従ってまばらになり、生の岩盤が大きく露呈しはじめ、太古の領域をくまなく覆った重い氷河が残した鋭い爪跡がありありと見える。そして氷河が残っていた幾百かの大小の湖がちりばめられているのが見る目に美しかったが、ただひとつ私が楽しみにしていたもうひとつのこと、北ロッキーの白い山々が遠すぎて見えないことが心残りだった。

ジェット機の乗客の大半は、北の基地に帰る技師や商人らしかったが観光客も見受けられた。ちょうど日本で国鉄が「DISCOVER JAPAN」をやっているようにカナダでは「EXPLORE WEST CANADA」のキャッチフレーズでさかんにカナディアン・ロッキーズやアラスカの自然に誘致している。そればかりではない。機内で見たパンフレットによれば、人数さえ整えば北極まで飛び、そこで着陸し中継点を経てトロントに帰って来る観光飛行も行なわれている。北極はもはやアムゼンの時代ではないのだ。

エスキモ어의町イヌヴィックは凍土の上に建っている。資材はすべて五月から九月初めまで運行する船によってマッケンジーを運ばれほとんどすべて資材が文明から来たものだ。冬に備えて建物は床が高く凍土への基礎打ちには強い動力を要するという。町の真中にはあるカトリックの教会がエスキモーのイグルーを型どって造られているのが面白く、また多くの家がアルミのプレハブであることもカナダらしくあった。気候は東京の晩秋、案外寒くない。秦漠とした丘にファイヤー・ウィード(炎の草)と呼ばれる紫紅色の花が群生しているのが奇異だった。予約したはずの小さなホテルに部屋がなく、もう一つしかないさらに小さなホテル(その名はホテル・エスキモー)の一部屋をカナダの友人と分け合うことになった。町はずれにある極寒パイプラインのパイロット・クラブを見学し、まだ暗々と明るい夜の九時頃、ホテルの粗末な食堂に入ると驚いたことにエスキモーの娘たちがわんさかいる。それぞれ白人やインディアンや仲間のエスキモーの男の子たちとコココーラやビールを飲んで明るく騒いでいる。つぶらな黒い瞳をもった瓜ざね顔の美貌

の娘が多い。顔つき体つきが日本の娘たちとそっくりだ。町が発展したのもオフィスやスーパーマーケットの職場も増え小学校もできているので、英語もエスキモー語なまりではあるがちゃんと話しているのが聞かえる。そのうちに極北の生活と労働がその顔に深く粗く刻みこまれた四十がらみのエスキモーの婦人が私たちに近づき、テーブルに黙って席を取り、次に断わりなしで私のビールを飲みはじめ(エスキモーの習慣なのかも知れない)私をじっと見て、お前はエスキモーかと訊いた。いや日本人だと答えると、訥々とした充分に理解出来る英語で、「お前と私とはブラザーだ。日本人とエスキモーとは昔シベリアで一緒だったのだ。お前たちは南に行つて、自分たちはここに来たのだ。」と何の疑いもなくそのことを真剣に話すのだった。彼女の話はなかなか面白かった。自分の夫は白鯨撃ちだ。冬になるとハスキー(北極犬のこと)を駆って羊に出る。夫が射止めた白鯨を自分の手で皮を剥ぎ、内臓を出し、肉を取る。この技術は自分が十二、三の頃、夫から教えられたものだ。と誇らしげに語った。さらに、白人がここに来て天然ガスの採掘を始めたら鯨をとるのが今までより難しくなつた。鯨しからん話だ、とこんな僻地でも自然環境の破壊に対する抗議の声を聞かされることになった。その夜イヌヴィックは白夜で、私たちは朝方まで寝つくことが出来なかった。(あとがき)

最近、横須賀線で木原均博士にイヌヴィックの婦人の話を申し上げると、先生は、「それは本当です。今から二万年前の水河時代、日本人は北から南方へ、エスキモーはベーリング海峡を渡つて東に行つたことは定説になっている。」と直ちにこの教示を受け、興味深いことだと思つた。

『岐阜支部発会式に参加』

吉沢一郎

岐阜にもいよいよ支部が出来たという話には少し前から聞いていたがそれが去る十二月の六日(水、大安)に発会式をあげる段取りになった。場所が岐阜市役所の南角にあるレストランその二階。始まったのは午後六時。東京からは正式に三田会長と成瀬副会長が出席し、私は今までヒンズー・クシユ会議その他で岐阜、大垣の人々には大変お世話になっているので、そのお礼の意味も含めて個人の資格で参加させて頂いた。

出席者二五名、委任一七名、計四二名ということでまず数の方では成立した訳である。私にとっては旧知の人の方が多かったが、暫らく振りの人もあつた。

司会は岐阜大の藤井洋氏、議長は大垣の高木碩男氏ということで議事が進められたが、初代支部長は万場一致で今西錦司氏(現在岐阜大学長)と決定し、早速支部長としての挨拶があった。続いて三田、成瀬正副会長、吉沢、伊藤久行氏の順で祝辞が述べられた後、再び今西氏が立て、「岐阜の山と私」ということで今までの岐阜の山での経験を語る。

それから記念写真を取り個人紹介が行なわれ、七時にはもう発会式は終わってしまった。支部規約と役員案も承認されたが、これは支部長決定のあとで行なわれたと記憶している。

因みに支部役員は次の通りである。



御気謙の今西支部長 (吉沢写)

支部長 今西錦司
委員 高木碩男、高木泰夫、藤井洋、古田初太郎、高橋達雄
会計監事 篠田公平
相談役 井上孝二、伊藤久行

とに角、岐阜支部は出来たし、今西

大人は支部長になってくれたし、皆の意気はあがっているし、ということでは何かから何まで旨くいった。最後に将来のご発展を祈りながら筆を擱くことにする。

名誉会員

辻村太郎さん

をお訪ねして

成瀬岩雄

辻村さんは本会の名誉会員の中でも高齢のほうでもあり、久しくお目に掛っていないので一度お訪ねしたいとは思っていたのだが、今年の晩餐会席上において名誉会員の皆さんに名誉会章を差上げる機会があるいはお目に掛れるかとそこに期待はしていたものの、生憎ご欠席で期待はしていません。早速名誉会員章を携えてお宅をお訪ねしたところ、「あの日はもう一つ他に学会関係の会合があったので残念でした」とのお話であり、それでもお元気で安心した次第である。

何れにしても戦後暫らく経っていた「名誉会員を囲む会」もいっしょか立消えになってしまった今日、大先輩の風貌声咳に接する機会が少なくなつたことは誠に残念なことであり、殊に今年はおオリジナルメンバーの最後のおひとり、武田さんを初め、田部さん鳥山さん牧野さん等という登山界の大長老を一挙にしてうしなつただけになおさら皆さんお元気のうちに何かの機会を作ってお目に掛れればと思うのはあれわれの等しく熱望するところではないだろうか。それだけに先般、今では最高年齢の三枝名誉会員が晩餐会に出席され乾杯の労をとって下さつたことはせ

めての慰めでもあったのである。戦前からの本郷の農大裏の先生の閑居をお訪ねすると先生はずでに数多くの水河遺石を整然と並べておられて小生のために時には小石を小児の頭を愛撫するがごとく撫で廻しながら一つ一つ丁寧に説明下さり、また、昔の、本邦における水河の有無に関する学会の、先生より一時代前の諸先輩の論争時代のことや、その後の先生のご苦心談をお話し下さり、この方面の知識には全くうとい小生にまで小学生にでも判る様なこと細かい丁寧さで説明して下さい、恐縮した次第である。名誉会員章の贈呈を今日まで早く実現出来なかつた失礼を申し述べたところ、親しく手に取られて矢張り年齢のせいだろう、目を細められて暫らく眺め大麥喜ばれ「三枝さんは今でも昔のように貴公子のような穏やかな方ですか……久しくお会いしていないので晩餐会の日の写真でもあったら拝見したいですね……会報「山」はいつも隅々まで熟読して下さり……」と洩らされるのであった。

何万年前の水河時代は平地の気候はどんなだったんですか……との小生の愚問に対し「その時代は勿論箱根、丹沢辺りにも水河はあり、東京辺りでも岩魚や雷魚もいたということになるのだとも伺い驚いた次第である。それにその時代から流されて来たという水河の遺石がお宅のすぐ近くに最近建てられたアイソトプ研究所ビルの建築の際のボーリングで地下からぞくぞく発見され、近頃は石ブームで石仏泥棒の横行にまで監視の眼を光らせなければならぬ近所のお巡りさんも先生のこととはよく知り尽くしているの別に「石泥棒」としてがめられることもなく、大威張りで転がしたりして持って来るのですよ、等と語られ、なるほどこれなら石ブームの気運者でも一見、水河の遺石とは判らない……しかし先生にとつてはダイヤモンドにも等しい大石が門前から庭内にかけてごろごろしている、否、安置されているのを見てはこれこそ先生にとつては宝の山ではないかと内心お喜び申上げたのである。

そしてまだ、帰りには態々薄ら寒い夕闇にも拘らず小生を近くのビルまでご案内下さり「この辺り、あの辺り」といちらち出て来た場所を次々に説明されるのには唯々恐縮、「お寒いですがら」などという余計なお世辞すら通じさうもなかつた次第。実は今日お目にかかる前に年齢も八十何歳だし老人に有勝ちの聴音機片手にストープにでもかじりついて細々と聞きとれないような声のご隠居さんのような先生と応待するのではなかつたか、とはんだ失礼な予想でお邪魔したのだが、とんでもないです。さすか、さすがに階段の上り降りは少々息を弾ませておられるようではあつたが、談ひとたび石におよべばおとしには全く無縁の「眼光人を射る」ごとき目を輝かされ、さながら大磐石をも片端から押しつけ乗越え突進する本流のそれのように滔々と語り続けられるので、小生は「石の上にも三年」は先生なら「石の上にも十年」だつて平気だぞ……と内心、先生のご長命を勝手に確信した次第である。あまり先生が石を膝に傍目も触れず嬉々として矢次々に話されるのでこつこつと失礼するのにも悪いと思つた、といつて長居は悪いし、いささか躊躇せざるを得ない破目に陥入つてしまつたが、最後に辻村伊助さんがローザ夫人との連名でロンドンやモスコから先生宛に送られた古茶化した絵巻書も拝読し、その上、富士山の吉田口の五合目で見つかったという水河の遺石と、先述のアイソトプビルの地下からの遺石を

お知らせ

現地支部長会議 開催の件 現地小集會

当会宛に寄贈して下さつたのを有難く頂戴してお別れしたのだが、振返つてもう一度帰路を急がれる先生の後姿を拝見して、あらためて先生の学界に対する熱意とご長命に「末永く幸あれ」と念せざるを得ざると共に、学者の熱意とは小生も多少聞き知つてはいるも

昭和四十五年越後において行なわれた現地支部長会議は、回を重ねること四回、宮城、秋田を巡り今年には津軽の海を渡り北海道で行ないます。山岳は大雪山国立公園内の南西部十勝岳(二〇七七m)に全国各地の会員を迎えて楽しい愉快な現地小集會にしたいと思つています。(道産子会員へ別名エゾミヤゴモノハエ)は手ぐすねひいて原始サーピスに心掛けます) 十勝岳の東面に広がる原生林は、美しき六月という梅雨の少ない初夏の北海道の緑が一層美しく映える。また活火山十勝岳は昭和三十七年六月に噴火し、多数の火口より噴煙を上げる本邦を代表する火の山であるので、山麓には温泉が湧出し、登山の疲れを癒してくれます。大いなる自然のくに北海道へ是非どうぞ。

の、先生のは桁違いで、読書に一心のあまり卵と間違えて傍の懐中時計を熱湯に入れたという、さるドイツの碩学を、今ここに眼のあたり見るような気がして、あらためて先生に敬意を表せざるを得なかつたのである。(四七・一一・一六)

西八丁目北海道大学農学部附属 植物園(札幌駅より徒歩七分)

▽宿泊場所 初日は北海道空知郡上富良野町吹上温泉白銀荘(ヒュッテ)、第二日目、上富良野町菅国民宿舎カミホロ荘

▽日程

・第一日 六月十五日(金) 札幌は午前10時より正午まで受付 札幌発12時30分(貸切バス)、旭川は正午より3時50分まで受付 旭川4時発 白銀荘着5時30分 6時30分より支部長会議(十勝岳温泉)

・第二日 六月十六日(土) 午前6時白銀荘ヒュッテ発、11時十勝岳頂上12時下山—十勝岳温泉カミホロ荘着4時30分 6時より参加者交歓会

なお一部上ホロカメトック山、富良野岳コースの設定も予定してあります。

・第三日 六月十七日 午前中反省会と解散式 午前11時(貸切バス)発 4時札幌着

▽服装、携行品等 晩春の残雪山行程度 嗜好品、非常食若干持参のこと

▽参加申込 先着百名程度で締切5月20日必着 住所氏名受付場所明記の上予納金千円を添え〒六〇札幌市中央区北二条西八丁目北六植物園内、日本山岳会北海道支部現地支部長会議事務局宛、郵便振替口座小樽一六九三七番に申込下

ある復活会員の述懐

周布光兼

一昨年、復活会員にしていたときまで。復活会員になったいきさつというほど大げさなことはありませんが、一応気持ちに区切りをつけるために簡単な随想にまよってみました。

私もいつしか満五十七歳ほどになりました。中学二年の夏休みに土高地キャンプ生活に応募したのが山へのきっかけで、以後先輩に引かれて縦走や岩登り練習、スキーに雪山等だんだんオーソドックスに巾を拡げるうち山の虜となってしまいました。牧場に行くはずだったのが岩場あさりになったり、スキー場合宿のついでにどうしても極めずにはいられなくて、冬の八ヶ岳赤岳に一人で登った十七歳の頃。夏は穂高湖沢の合宿を終えてまだ見ぬ飛騨へまわり立山を歩き、剣のハッ峯六峯以上をこれも一人で辿った時のことなど、現在とその頃との間にはずいぶんいろいろなことがあったので、決して「つい昨日のような」気は、ませんが、しかし懐しくその一つ一つの情景が意外に鮮かに頭に浮かんで来ます。

時代は初登頂の時代からヴァリエーションの時代。雪中キャンプと雪洞の実験期。また極地法による練習の時代。そして目標は当時ほとんど山頂をあけ渡していきなかつたヒマラヤやカラコルムのジャイアンツ、それと中央アジアで、私共あの頃の仲間はその夢にずいぶん浮かされ夜もグルーブで熱っぽく語り合ったものでした。

だが戦争に日本がめり込んだのもその頃でした。そして海外の山行や探検の夢も消え、良き友の何人かも戦争で失った私共の時代です。やがて敗戦という形で訪れた現実には、特にそれまで幼少の時からコチンコチンに「教育勸語」(というものがありません)で育って来た身には何かと矛盾が多く、しかも山では死ななかつたが、死を覚悟した戦争からは不思議に生きて帰って来られた身として、フリーな山登りの感激以上に、例えば私にも与えられた人間魚雷の隊長といった戦争中の絶対観の方が体にこびり着いてしまい、とうとう青少年期を通じて一途に燃やした山への熱情も、新しい目標宇宙・地球の観点を自分ながらに発見(当時のこと)すると同時に三次的、四次的のものとなり、遂にスポーツ的な山登りに自分の間おさらばする心境とは相成った次第です。

だが山登りとはそうでも、宇宙・地球の人生観とか言えば「自然そのもの」との別離は考えられません。だから、人間社会のいろいろな面を経験したり、いろんな人と付合ったりしながら、ひっそりとも、木や草や岩や小さなせせらぎとの会話を持とうとする気持は忘れなかつたつもりです。

だから、自分は山登りに戦後精を出さなくなつたが大自然との戦いに対する関心から、そして昔の郷愁から、山岳会というものは忘れてはいなかつた。大先輩の方々がその方々から見た私ごととき若輩の思惑に拘らず、せつせと相連れず山に行つていられる情報も入つて来た。また山岳会の幹部の方々がたゆまず会を運営して来られた努力も知つて来た。若いこれからの人達が昔の神秘的な山を目ざした時代のように夢を持ち行動する姿も目撃する。そんな頃に、いつしか時として休

不調や疲れを感じ始める。これではいけない、どうしたら心も体もまた健康になれるか。自動車免許も取り走り廻つた。だが車では体の鍛錬には明らかにならない。日頃の柔軟体操では味気ない。とつといつ考えればやっぱり自分には自然——山が向いていそう。そうだなあ、これからまた山歩きで楽しみながら体を鍛えるか。そんなことからまた山岳会に復帰したわけ。

さてそんなわけで、一昨年(昭和四十六年)の晩餐会は実に楽しかった。何しろ日本山岳会のお歴々と三十何年ぶりの会合に出席したわけだから、その晩何百名かがわいわい言つてる中でしばらく三十名近くの旧知の方々を探し当てお話できたことの嬉しさは、あてはわかない喜びだつたかも知れないと思つてゐる。

それから実際の山歩きも、丹沢の峠道とか箱根とかで足ならし。夏には思ひきつて飛騨から西穂高と思つて出かけたが、雨で仕方なく新穂高温泉からロープウェイで上まで行つただけで高山市見物を中心となつてしまつた。九月の連休は木曾駒橋断で張り切つたがこれまた台風来予報で延期、当日はちよつと山岳会の飯盛山の集いの日でもあつたが、こちらは行けなかつた。

そして思い立つとうとうも残念で、十一月三日から五日の飛石連休を利用してまた木曾駒へ再挑戦。駒ヶ根からバスとロープウェイで千畳敷へ、山荘泊。翌日千畳敷から中岳を経て駒ヶ岳頂上へ。ちよつとその日午前中は快晴で、もう三十㎞位積もつた新雪の山を素適くばかり楽しく辿つた。御岳のグルーブが結構集まつたが、私もその何人かと共に木曾の上松道を下りたのだった。でもその長かつたこと長か

さい。
・予納金千円は参加費に繰入充当する。またこの行事の前後道内旅行、山行を予定の方は予めご連絡下さい。
「北海道支部」

『山岳』覆刻版 第二年第一号 出来!

初期『山岳』の覆刻版は、図書委員会の手によって着々とすすめられています。大判時代の第四年までを、年間三冊の覆刻を目標にしてありますが、このたび第二年第一号が刊行されました。希望者は代金をそえてルームまでお申込みください。全巻購入ご希望の方は予約していただけたら幸いです。なお、第一年第一号、第三号は残部僅少につき、大至急お申込みください。
◇第二年第一号の主な内容
日本アルプスの南平(小島水) 白峰北岳山誌記(伊津九郎・高松誠) 秋の金峰山(高野鷹二) 寒中富士登山記(佐藤順一) 日光諸山山誌記(小久保融・小泉信三) 白馬岳及鍾ヶ岳(志村鳥嶺) 別冊付録「会員姓名宿所録」表紙(小杉未醒)

集会のお知らせ

図書委員会

図書委員会では、二月から三月にかつたこと。高距離約二千を五十七歳で一人で行くのは実際は足腰がガクガクになるようだった。しかし加減しながら頑張って、夕方木曾の棧温泉の部屋に一人寝ころんだ時の楽しさはまた格別であった。ガイドブックのコスタイムはオーバードレスだが、そんなことはどうでもよかった。私はただ、またアルプスの一つを越えて来れたという喜びに年甲斐もなく浸り、それからそれ

けてつぎの集会を計画しました。会員諸氏のご参加をお待ちしております。
★第三回「山岳」を語る夕
日時 二月二十二日(木)午後六時
場所 本会ルーム
講師 松方三郎氏

この会は第一回(一昨年)に富士文庫をめぐって出席会員が語りあい、第二回(昨年)には藤島敏男名誉会員にお話しいただきましたが、今回は、健康を恢復された松方名誉会員をお招きして、内外の山岳文献についてお話をうかがおうとおもいます。
★山岳史懇談会
日時 三月下旬の予定(正確な日程は次号に発表します)
場所 本会ルーム
講師 三枝守博氏 山崎安治氏
三枝名誉会員をかこんで、初期「山岳」のこと、明治・大正期の日本アルプス登山、あるいは山をめぐる交友のことなどをうかがいたいとおもいます。いわば日本山岳会の歴史を勉強する会です。ご期待ください。

上高地山岳研究所

募金状況(48・1・25現在)

* 応募件数 四四八件
* 金額 三、七九六、四〇三円
* 目標額対比 七五・九%

ある復活会員のつまらぬ筆すさび、こころで打ちまします。日本山岳会の前途を祈りながら。ただ私は仕事とか住所の都合上やはり今後も単独行がやむを得ず多くなりそうですが、皆様今後共よろしく願ひします。ご健闘を念じます。

《第十一回の一本展》

武田久吉著作展

十二月二日に催された昭和四十七年
年次晩餐会の会場で、本年も恒例によ
って「この一本展」が開かれた。本年
は、第十一回目のこの一本展であり、
去る六月に逝去された本会発起人、名
誉会員武田久吉氏の著作展がその主題
になった。その席で晩餐会参加者には
解説のパンフレットが配られたが、参
加されない会員、特に地方の会員の方
々にはお渡しできないので、従来、こ
の会報に再録して紹介してきた。しか
しパンフレットは十八頁にわたる印刷
物で、会報八頁分に相当し、全部を取
録するには編集上の無理があるので、
今回は「出品目録・解題」の部分で、
その執筆者である春田俊郎氏にお願
いして抄録に書き替え、会報二頁相当
に圧縮して二回に分けて掲載すること
にした点ご諒解をお願いする次第であ
る（編集部）。

「武田久吉著作展」について

名誉会員・武田久吉氏は、六義園の
有志閑談会に出席することを楽しみに
しておられ、そのために「平ヶ岳警見
記」（山上水蘇末来記）と題する原稿を
書かれていたほどであった。それは前
年の平ヶ岳登山と植物の観察をのべた
一文で、閑談会の席上で朗読される予
定であったが、はからずも氏はその三
日まえの六月七日、八十九歳の天寿を
全うされた。

あらためていうまでもなく武田久吉
氏は、本会創立発起人の一人。植物学
者としての氏が「花の姿を尋ねて」末

知の山々の探索をはじめられたのは、
遠く明治二十年代にさかのぼらなけれ
ばならないが、以後、登山と植物研究
にふかい関心を持たれ、七十余年にお
たって内外の山々に足跡を残された。
その多岐にわたる著作を見てもわか
るに、氏の生涯は、なによりもまず厳
密にして正確さを旨とする科学者のそ
れであり、そこには未知のものを求め
てやまぬ真摯な登山家の姿をみるこ
とができる。近年、観光公害の犠牲とな
ってゆく日本の現実をうれえて、自然
保護をさげびつづけられたことは、わ
れわれの記憶にあたらしいところであ
る。

年次晩餐会の会場にてひらかれる恒
例の「この一本展」は今年で第十一回
をむかえることになった。この催しの
主旨は、山に関する蔵書のなから
「この一本」とおもわれるものを会員
にお持ちより願ひ、昭和三十七年以来、
各位の熱心なご協力によって、年次晩
餐会には欠かされぬものとなった。その
折々に記念的な意味をこめて「志賀重
昂生誕百年展」「高野鷹蔵氏を偲ぶこ
の一本展」「明治百年山岳図書展」「深
田久弥著作展」などを立案し、展示し
てきた。本年は不幸にもわれわれは多
くのすぐれた先輩会員の計に接し、ま
た、本会の創立と発展に尽力され、ま
た植物の研究にかずかずの業績をのこ
された武田久吉氏のご遺徳をしのんで
この催しが企画された。明治三十年代
以降、晩年にいたるまでの著作物、お
よび故人の遺品を展示することになっ
たが、武田久吉研究の一助ともなれば
幸せである。

この「武田久吉著作展」を準備・展
示するにあたって、武田家からは多大
のご協力をいただいた。著作物等につ
いて解題は、博物学徒としての春田俊
郎氏の執筆になるものであり、横山厚
夫氏がこの編集にあたった。本日の展

示その他については、伊倉剛三氏をは
じめ図書委員諸氏の協力を得た。記し
て厚くお礼申し上げたい。（近藤信行）

出品目録・解題（抄録）①

単行書

高山植物 大正六年 同文館

第一章登山、第二章山地の植物帯と
その景観等、全部で六章。第二章では
木曾御岳、日光、白馬岳、南アルプス
の植物景観を述べながら登山案内も兼
ねている。南アルプスの項では現今と
全く違ったコースで、当時の労苦がし
のばれる。巻末の付録は日本特有高山
植物目録と、シラネニンジン、シラネ
アオイなどのシラネは日光白根に由来
することなどを解説した日本山岳界の
植物が一覧表になっている。

高山植物の話 大正十三年 大阪毎
日新聞社

本文は三十六の小節に分けられ、植
物学の基礎的なこと、例えば葉の構造、
気孔、年輪等についても一節を設けて
いる。既に今日の自然破壊を予測し、
「高山植物の研究と保護」の節で、乱
獲を厳しく戒めている。写真、挿図多
数。冒頭に「我がなき友、農学士辻村
伊助君の霊に捧ぐ」の一行の頌がある。

中等植物新教科書 大正十五年 積
善館

昭和十二、三年頃まで旧制中学校の
植物教科書。文語体の文語であるが、
内容は実験、実習を主とした楽しい授
業を進めるように配慮してある。著者
の恩師、堺山信順先生の影響が強く表
われている。

尾瀬の植物景観 昭和三年 大日本
山林会

第一部は林学博士田村剛著「尾瀬の
風景」。第二部がこの「尾瀬の植物景
観」で、併せて「仙境尾瀬の景観」と
山林会

して発行された。昭和二年六月に東京
管林局の依頼で尾瀬地方を視察、調査
したときの報告書、昭和五年 梓書房
著者の代表著作の一つ。明治三十八
年七月初めに初めて尾瀬を訪れた感激
を綴った「初めて尾瀬を訪う」はまさ
に珠玉である。「尾瀬再訪記」は大正
十三年七月に尾瀬付近を十三日間亘
って歩き、燧岳、会津駒ヶ岳、至仏岳
に登ったときの記録。「春の尾瀬」は
昭和二年六月に残雪の尾瀬を歩いた時
の紀行で、このときは日崎山から檜俣
川に出ている。「秋の尾瀬」は昭和三
年九月下旬の紀行。「山人と語る」は
平野長蔵翁との触れ合い。高山ではな
いが深山としての尾瀬の美、静寂が画
かれ、保護の重要性も叫ばれている。

高山植物写真図彙 志 昭和六年
高山植物写真図彙 貳 昭和七年
学友田辺和雄氏と共著で梓書房発
行。両方で二〇種の高山植物が収録
されている。大型写真集で写真版四九
〇枚。一種類の植物についても、群落
全体、花の拡大、果実などのそれぞれ
の写真を示し、また地理的、生態的な
変異も示してある。北海道大雪山、夕
張岳から全国の高山にわたり、解説で
は垂直分布、森林限界が詳しく書かれ
ている。大型版で上製箱入。

日本地理大系 別巻 富士山 昭和
六年 改造社

武田久吉編著となっており、内容は
小林義秀氏と分担。解説では富岳巨面
相、笠雲、風景の保護と改造など五節
が武田氏の執筆。各方面から見た富士
山の写真九二枚のうち、八八枚が武田
氏撮影。このほか、日本地理大系、山
岳篇にも白山、高山植物等、武田氏の
執筆されたものがある。

高山植物図彙 昭和八年 梓書房
高山植物図彙 昭和十二年 養賢堂
共に横書き、リネックザックに入れ

て携行するのに便利な小型の植物図
鑑。黑白写真ではあるが極めて鮮明で、
分類学の順序に従って配列。解説は形
態花形、生育地、分布など手短かにま
とめ、一種あたり二百字ぐらい。原色
図鑑が出版されるまでは、登山者に最
も多く愛用された。後者は発行元は変
ったが、前者の増補改訂版。

Alpine Flowers of Japan 昭和
十三年 三省堂

英文で書かれた「日本の高山植物」
日本の代表的高山植物百種について、
英米人を対象に格調高い英文で解説。
登山と植物 昭和十三年 河出書房
大正七年から昭和十三年までの間に
太陽、婦人画報、改造などの雑誌、東
京朝日、東京日日などの新聞、「山岳」
や「会報」に書かれた短篇の紀行、随
想三十二篇を集めたもの。最初の章登
山する人々への八篇は、当時激増し
てきた若い登山者への警告が主で、「山
は人間一人だけ、甚しい障害なしに通
れる道があれば充分で、それ以上の大
きな道は不要」と述べ、団体登山にも
反対している。

高山の植物 アルス文化叢書 1
昭和十六年 アルス社

山麓から高山にかけての樹木を含め
て一五四種類の植物の写真と解説をの
せ、別に垂直分布などについて説明。
植物の種名を調べるより、机上で眺め
て楽しむ本として好適。

尾瀬と日光 昭和十六年 山と溪谷社

多数の著者との分担執筆で、武田氏
が編集。奥日光、尾瀬、南会津のガイ
ドブック。武田氏執筆のものには「日
長の文」の序に代えて「のほかに日光
の瀑布」及び「山岳」「山と溪谷」「文
芸春秋」などに載った小品八篇から成
る「日光、尾瀬隨筆」があり、また
「長蔵翁の思い出」「日光と尾瀬山岳名
義小記」などの著者らしい文がある。
(春田俊郎)

小熊捍博士のこと

初見 一雄

後半は遺伝学者、初め昆虫学を志望された小熊博士は数少なくなつた本会の初期会員の一人だったのである。

明治三十六年の府立一中卒業で名譽會員鳥山さん(故人)と同級であり、同時に博物学同志会の有力な會員であつたと、目下本誌に連載中の春田氏の論文中に詳述されてある通り、博士は赤坂生まれで山王神社の氏子だつたと自称される江戸ッ子であつた。

われわれが小熊博士に親炙したのは今から三十九年も昔のこと、博士にとつては五十歳を迎えようとする、今ならば壮年期といえる年代だつたから、もし登山の趣味をもちながらえておられるか、または山岳会の會員を統けておられたとすれば、北大の山岳部か山の会に關係をもつておられる筈であつた。しかし山に關しては、いささかも、露ほどもかかわりのない存在になつてゐた。

明治四十四年七月の東北帝大農学科(現在の北大)の生物学科はただ独りだけの卒業生を送りだしてゐる。それが小熊博士であつて、教える方と教えられる方と一対一の場合も多かつたらうから、その辛苦も自ら身にしむ覚えがあるが、よき時代にその業を終えられたわけである。

中学の二年先輩に最近亡くなられた武田博士あり、一級下の山川黙(河田)氏、同クラスの鳥山さんなどに囲まれてしまへば初期會員の一人となる理由は充分なはずけることになる。
明治三十八年十月に日本山岳会が出

発したとすると、その時代の小熊さんは札幌にいた筈で、たつた独りの北海道在住會員ではなかつたらうか。そう思ひながら山岳の第一巻二号を調べると新會員紹介欄に小熊さんと宮部さんの名があつた。札幌農学校第二期生の宮部博士は、内村鑑三氏と同級で當時は教授の地位にあつたに相違ないし、謹厳犯すべからざるほどの風貌の上に

一世の碩学とくれば、気安いお付合ひもできかねたに違いない。明治十二年卒と四十四年卒とでは親と子以上のへだたりはあろうし、江戸を離れて三百里の小熊さんのまわりは賑やかなものであつたとは思われないのである。

この時、そこに心強しと感ぜられたであらうと想像できることが一つ生じた。それは武田博士が明治四十年から以後三年間ドイツ語講師(専門は植物学であるべきだが)として札幌に赴任してこられたことである。しかしながら少くとも一年程はドイツ語の講義を受けなければならぬ破目に陥つたといふことが事実ならば、あの辛筆ならびなき先輩との再会、果たして運、不運いずれであらう。ここで誤解しないであらうことは、教師と生徒の間柄になつてしまつと、持ちまえの舌鋒を竹刀に変えて面をとらんと打ちこんでくる先輩に隙を見せず切り返し、またもかぶせてくる鋭い皮肉にも余裕ある応答というふうには、更に交わりを深めたことがたやすくできにくくなつてしまつたのではないかと、これも秘かな想像にすぎないことなのであるが。

小熊博士がいじつ退会されたかは、今に上つては探りだすこともない。同好の士がまわりにあることこそ、本人の趣味向上の支えとなるであらうし、話合う相手もいない、刺激もうけない、これが続けばせつかつかの芽生えもしほみこんでいくだけであらう。

理学部に講座を持ち、そちらが主で

農学部でのそれは出講のかたちであつた。たつた二人の学生のために週に四時間の講述を一年休むことなく続けられたのは明治的気骨の現われか、当時の辛さも今は懐かしい。

端正な身だしなみ……何をかおいてもすく浮かんでくるのはこれである。「ハイカラ」から「モダーン」までが明治大正時代のおしゃれを指すもの、昭和になつては「ダンディー」で当分のれを越す表現なしとまきまき、小熊さんはそのめいめいの枠の中にびつたりとはまつてくる。中身は変わらないにしてもそのこなしかたには、着るもの、履くもの、かぶるもの、こまかくはハンカチーフ、靴下にいたるまでとどまることなく、しよ酒なものをつけておられた。どういふお考えも真赤な色の靴下をはいておられるのには目を見張つたものである。当時の札幌では原色に近い男物の靴下は「上等舶来」が僅かに並ぶ丸善といえども扱つていなかったから、恐らくこのソックス、ロンドンズのスーツ、エディーあたりに注文製作させたものであらうか。

昭和十年だつたか或はその前だつたかの秋の屋敷がりのことである。旧館(昔の白壁の校舎)の二階の窓から外を見おろしてゐると、理学部の方向から小熊博士が歩いてこられるのが眼にはいつた。裏門から桑園を通つて帰毛されるのであらうか、ステッキを振りふり悠揚迫らずである。人っ子ひとり濃い芝生の上にエルムは黒い影をひいてゐる。やがて師はそのローンの端を斜めにきる敷石みちにかかると、少しまへから道路掃除が始まつていて、窓の下あたりにもひどい埃が舞いはじめ

る。敷石みちは窓の直下をとり裏門にぬける唯一つのもので避けるパイパスがない。この土埃と使役の小母さん

達に道を塞がれてしまつたとは、まことにお生憎な始末になつてきた。「オイ押がやつて来た、どうなるか見ものだぜ!」といったのは悪童の一人だが、どうするか、どうなるかに興味をもつたのは、「ダンディー」と汚染の出会いには如何に解決されるべきかを試したかつたからで、おまけに高見の見物ときいてゐる。実にその時、小熊先生少しも騒がず、やお胸のハンカチーフをすまみだすや、一振りサツと折り目をほぐす、眼を射るその白さ、思いっきり左へ返したその腕を再び右へ、拡がった白孔雀の尾羽根また畳まれて一筋になつたのを衝える。左手で突き立ててあつたステッキを小脇にかかえこむやキツと行くに屯す一群を睨む。そしてトンと音をたてんばかりの調子で濛濛たるなかへ突進していかれた。

その動きの一つ一つにはキマリというものが、カタとでもいふものが感じられた。たとえば花道のかかりで、まさに六方を踏まんとする弁慶のしぐさにも似て……この光景、今もって鮮かなものがある。

昆虫学への貢献としてトンボ類のある種の発見もあるが、それよりは名付親になられた例が多い。赤トンボではアキアカネ、京都で発見されたマイロアカネ、肩をたてたような仇つぽさがあると説明のあつたマユタテアカネ。そのほか赤くないムカシトンボなど。

昭和二十三年定年退官されてからは小田原に居を移され、国立遺伝学研究所(三島市)の創設に努力をかけたむけでその初代所長を勤められた。次を木原博士に譲られてからようやく長い期間の官職から解きはなされ、以後を小田原で自適されておられた。逝去の日は一昨年九月十日とおぼえてゐるが、一年以上を経てこの甲文些かどころかだし遅れも甚しい次第。

発表された論文も数多いことは当然ながら、数冊の随筆集の一つにはエッセイストクラブ賞を受けられたものもある。ホビーである洋画にも秀でたものがあつたと思うが、この方面は札幌黒百合会の発起とそのパトロナージュ以外には世にきこえていない。在世八六年。謹んでご冥福を祈る。

アンナプルナI峰の計画

信濃支部

かねてからの念願であつたヒマラヤへ、信濃支部では創立二十五周年に当たる一九七二年に登山隊を派遣すべく目標をアンナプルナI峰に求めて計画を進めてまいりました。然るに相つぐヒマラヤにおける県内登山隊の遭難によつて、一時延期中止の止むなきに至りました。内外に包含される問題に對していかに処理すべきであるか検討の結果、七二年に踏査隊を派遣し七三年に登山隊を送るといふ二年がかりの事業とすることにいたしました。そして昨春奥原教永隊長以下四名の踏査隊がネパールに渡り、初期の目的を達成して参りました。以来本格的に準備を進めいよいよ登山隊が出発する運びとなりました。

アンナプルナI峰は既に登頂された峰ではありますが、そのことは我々にとつていささかもアンナプルナI峰に対する魅力を減殺されるものではありませんが、またその困難さは厳然として我々の前に立ちはだかつております。我々は行手に立ちはだかるあらゆる困難に総力を結集して当たり初期の目的を達成したいと念願しております。計画の概要は次の通りです。今回我々はアンナプルナ北氷河上の六千m

ら七kmの間に続く高距約一千mの北東パットレスからの登頂を計画しております。この北東パットレスの突破が一つのポイントになると考えます。行動の概要 二月初旬先登隊出発、二月下旬本隊出発、三月初旬ボカラ集結、三月中旬ボカラを出発しミリストエイコラからアンナプルナ北水河に入り、三月下旬北水河の末端四五〇〇mにB・C設置後登山活動を開始する。北水河上の五二〇〇mにC・1、六〇〇〇mにC・2を設け北水河を越えて北東パットレスに取り付き、中間の六四〇〇mにC・3、六八〇〇mにC・4、パットレス上部雪原七二〇〇mにC・

5、鎌台地上七六〇〇mにC・6設置。登頂体制を整え、五月二〇日頃までに登頂する。五月下旬B・Cに集結、六月上旬ボカラ燻着、六月下旬帰国。隊の構成 隊長塚本茂樹 登攀隊長 浅輪幸久 隊員堀内章雄 松永敏郎 高橋貞利 浜正則 牛越正 塚原賢勝 片桐一三 降旗孟 医師教谷剛。信濃支部としては、ヒマラヤへははじめての登山隊であり、未熟な点も多々あるかと存じます。茲に計画の概要を申し述べて各位のご支援ご鞭達をお願いする次第であります。(塚本茂樹)

「アンナプルナ隊現地連絡先」
Japanese Annapurna Exp.
JAC SHINANO
P.O.Box281, Katsumandu, Nepal
浅草 岳
織内 信彦

小屋に一泊した一行は、ヤナの所有者である伊倉氏の厚意で、面白いうようにとれる天然の鮎、鱒、鮭をいりて串焼にしなが、北越雪譜にも詳細に述べられたこの地方に伝わる漁獲の方法と、その新鮮な味とを楽しんだ。急流に躍りあがる銀鱗のぶい光は夜陰の水面にもひときわあざやかに映え、一行は秋の夜の深まるのを忘れるほどに痛かった。あくる日は幸い薄陽のさす高曇り、山登りに絶好の日和である。東京に用事を残す島田、伊藤の両氏と五味沢の乙松荘の前で手をふって別れたわれわれは、それから浅草岳へ登った。な

メコ探りの連中がかなり入っているようだったが、登っていくうちにそれぞれ藪の中にもぐりこんでしまふとみえ、二、三組の登山者としか行き合わなかってよいだろう。このあたり、かつてはバナの原生林だったと思われるところだが、営林署のじゅうたん伐採の対象となつたらしく見るも無残な容観に変わつていた。原始以来の景観を損うことなく残しておきたい、そしてそれを後代の人達への遺産として引き継いでいくことこそ、日本の歴史を通じてこれというとりえもなかつた現代に生きる者の責任みたいなのだと思つていた自然保護の立場は一顧もされることなく、この北越の名山にも、少なくとも越後側に関する限り伐採の魔の手はのびていたのである。その惨状は眼を覆うばかりのものであった。浅草岳の頂上では、守門を始めとして、飯豊、粟ヶ岳、遠く平ヶ岳などの連峰が薄紫に淡採画のように霞んでいる展望をほいままにするのができた。脂ののつた鰻を頂上下の斜面の小笹を折った串にさしてラヂウスで焼いてこれらの景観に眼を走らせながら食べるのがかきかたのは昨夜の余恵といふべきか。

日本で最も美しい可憐な高山蝶であるクモツマキチョウは、明治四十三年七月十八日、中村清太郎の帽子によつて、種池付近の稜線で捕えられた。三日後にこの標本は風に飛ばされて、あや失われるところであったが、中村の決死の追跡によつて、どうやらその手に戻り、日本における新発見種として発表された。

これは翅の先端の橙色の斑のない雌であり、中村の採った雄と併せて、やっ

く山麓地帯にも分布することが判明した。島々の宿に住む往年のガイドで、本会とも関係の深い平林嗣次(キンシウ)ウヤと呼ばれているのは、動物や植物が好きで、地元では博物学者で通つていた。平林は特に鳥が好きで、オオワシの巢を発見したり、ホシガラスの生態を調べたりして、昭和十年代には当時まだ中学生であつた松浦明を

育てたガイドでもある。平林は昭和十六年に、クモツマキチョウを自宅の近くの島々宿内探集し、ほとんど平地といふような場所にもこの蝶がいることは蝶の愛好者をびっくりさせた。その数年前、東大スキー山岳部OBで昆虫学者の河田覚(発起人河田黙の末弟)は、中の湯付近でこの蝶をたたくさ

頂上から会津側の田子倉湖への降路は意外に急峻な道であつたが鬼ヶ面岳の山腹を彩る紅葉は降路の疲労を忘れさせて余りあるほど美しく燃えるようにみごとであつた。終始幸い多き山行であつたとをわれわれは喜んだ。

山と蝶のものがたり

クモツマキチョウと梓川

春田 俊郎

クモツマキチョウの二匹目は、四年後になって、諏訪の博物学者千野光茂により、南アルプスの大原の奥で採集されたが、この記録は『信濃教育』という教育雑誌に書かれたため、蝶の研究者の目にも、登山家の目にも触れず埋もれてしまった。その後更に十五年もたった昭和四年になって、内田清之助が大仙沢で採集して、蝶の専門誌に発表したのが、南アルプスにおける最初の発見と思われ、いろいろの文献に引用されている。

大教授となり、日本鱗翅学会会長をつとめた。中村の種池一色の槍沢と、クモツマキチョウは標高の高いところで採集されたので、海拔二千m以下には産しない高山蝶と信じられ、蝶の愛好者は当時、この蝶をとらえようと北アルプスの稜線近くを探して歩いてしたが、大正の末頃、島々谷の鱒留付付近で採集され、また八ヶ岳山麓の美濃川付近でも発見され、必ずしも高山のみではな

9

採集されようとは想像もされな

参加者 島田巽 山崎安治 伊倉剛三 近藤信行 坂下心 野上成男 山本良三 伊藤博夫 武田満子 佐々木光子 平井吉子

中村が明治四十三年夏に種池で初採集したクモツマキチョウは、北アルプスでもその後しばらく発見されず、八年後の大正七年七月に、槍ヶ岳を登つていた一色周知(會員番号六五五番)が、馬場平でようやく一匹を捕えた。

織内 信彦

織内 信彦

織内 信彦

織内 信彦

図書紹介



宮下啓三画

アンナプルナ南壁

ポニントン著
山崎安治訳

一九七〇年は、ヒマラヤ・ジャイアント・クライミングにおいて、新しい可能性を求めたいくつかの登攀が成功した。イギリス隊のアンナプルナI峰南壁（八〇九二m）、西ドイツ隊によるルパール壁からのナンガ・パルバット（八二二五m）、日本山岳会東海支部のマカルー東南稜（八四八一m）、オーストリア隊のローツェ・シャル（八三九八m）などである。一九六四年中国隊のゴザインタン（シシャバンマ八〇一三m）登頂により、八〇〇〇mの主峰がすべて登られた現在、技術的に一層困難なルートを求める方向が志向され、実践されるのは当然のことであろう。

南壁ルートを完登、五月二七日一四時ドン・ウィランス、ドゥガル・ハストンの二隊員によって、第六キャンプからの登頂に成功した。

この成功は、ヒマラヤ・ジャイアントにおけるヴァリエーション・ルート完登という先駆的業績を打ちたた意味で、一九六三年エベレスト西稜を初登攀したアメリカ隊の記録とともに、高く評価されるものであろう。

南壁の登攀は、今までのヒマラヤ登山の中で最も難しいルートであり、高度の技術を駆使した登攀といえる。文中しばしばアイガー北壁と比較されているが、「この巨大な雪と氷の世界はアイガー北壁の六倍以上に相当する」というスケールの大きなものである。

そもそもポニントン隊が、アンナプルナ南壁を目標として選んだ理由は、アイガー北壁における直登主義の延長として、最も巨大で困難なルートを登攀するという、ヒマラヤ壁の時代への先駆的役割を果たすことにあった。

しかし南壁では、毎日のように降る雪、膝まで没するラッセル、雪崩、落石、スリップに対する恐怖感、特に高度の克服や、巨大でしかも困難なルートをこなすために必要な、補給上の問題解決が重要な課題である。

第四キャンプ以上では、シェルバが利用できず、しかもルートの困難度や高所障害が増したため、荷上りはスミーズに回転せず、キャンプの建設もおくれ、補給は絶えずぎりぎりの線ではか確保されていなかった。

この間運行上の問題を含めて、最高所のリードを誰がとるかで隊員間がエキサイトしている。巨峰のクライミングは本質的にいてチームの努力である。どのようにエキサイトしたとしても結局はチームの利益のために、一人一人が限界まで力をつくすことにある。いい古されたことではあるが、心

身ともにたくましく、連続する苦しさ耐えぬける忍耐力、登攀能力(技術)などのバランスのとれた力の結集が成功の一つのファクターである。

戦術的には、長大な補給線を考えて、オーソドックスな包圍作戦(極地法)がとられている。今後このようなビッグクライムが益々ヒマラヤに求められるのであろうが、八〇〇〇mクラスのヴァリエーション・ルートということになれば、綿密な計画にもとづく包圍作戦の徹底、新器材の投入、小型通信機の積極的利用による情報収集、ルート工作、荷上げの効率化、隊員に対する管理と指示の徹底など、組織的質的強化が行なわれるであろう。そのようになった場合、個人と山、仲間(組織)の関係はどのように変質していくのか、関係がどうなれるところである。

酸素使用の問題にふれると、通常八〇〇〇m前後以上の高々度でスミーズな行動がとれるためには、七〇〇〇mあたりから組織的に酸素を使用することが好ましく考えられている。この隊の場合、ロック・バンドの基部約六九〇〇mからの使用を計画していたが、行動中は隊員の調子如何によって決めていく。医療用としては第三キャンプ以上で使用しているが、疲労回復のための使用ということで、睡眠用なのかどうか、使用量を含めて詳報されていない。

文章構成は、全般的にみてラフである。いそいで書かれたものなのである。訳者も骨がおれたことと思う。しかしそれだけにポニントンのなまなましい感情がせきざらに表現されている。特に極限状況下で隊をまとめるための苦悩、雪崩、落石、スリップに対する恐怖感、ルート工作の焦り、一方ではすさまじく気迫にみちたリード、親友イアン・クロウの雪崩遭難など、その一つ一つにポニントンの人柄がに

じみでている。

巻末に付記されている日誌、統計、装備、酸素、食糧のリストは、一、二のものをのぞいて特に目新しいものはないが、要領よくまとめられており、今後ヒマラヤでビッグ・クライムを求める人達にとって参考となる。

ポニントンは一九七二年ポスト・モンスーンにオーベル・ブリティッシュ・チームを編成、エベレスト南西壁に挑戦した。登山界の注目をあつめたが敗退の世界。日本山岳会の試登にはじまるエベレスト南西壁は、なんと日本人の手によって完登したものである。

(川上隆)
昭和四十七年九月 白水社刊
A5変型判 本文三七〇頁
定価一八〇〇円

カライ
徳高岳・槍ガ岳
三宅修
山下喜一郎 共著
岩橋崇至

文章も単なるコース案内だけでなく種高・槍の初期の登山の歴史を要領よく述べ、また特に徳高の岩場として二章を設け、その山の開拓を丁寧に説明している。その他上高地と常念山脈についても説明を加え、最後に登山の注意、モデルコース案内、ドライブレモ、槍・穂高の撮影ポイント、宿泊施設一覧をのせてあるのは親切である。

昭和四十七年八月 山と溪谷社刊
B6判 一八九頁 定価五八〇円

有望な鉱山が発見されると、この争奪のために領地争いが起こり、用兵の必要から軍用道路があちこちに作られて行った。現在私たちが登山に使っている南アルプスの峠道の多くは、戦国時代に確立されたものである。戦のための山道、間道開拓の副産物として温泉、鉱泉が発見され、開拓された。これらの所には戦国時代の武将の物語が語り継がれている。

昭和の十年代位までは南アルプスの山々は、原始林に包まれた黒々とした奥深い山波であった。当時、登山する者は特殊の人たちで、一年のうち数える程しか登山をしていなかった。登山というより探検的な色合いが濃かった。戦後、急速なダム工事や林道開拓は、南アルプスの原始的な面影をいっぺんにはぎ取る結果となった。未経験な登山者もたやすく入山できるようになり、伝説的な南アルプスの神秘性は一日と薄れしてしまった。大井川、野呂川、遠山川、三峯川の林道開拓、ダム工事の完成は、急速に都会の風を静かな山奥に吹きつけ、けげばけしい都会色を原始林の中へ撒き散らす結果になった。都会の風は気をつけなれど、マヤ文化をアツという間に抹殺した小数のスペイン人たちの歴史と同様な影響を、南アルプスに与えているであろう。世界的に優秀な日本製登山道具と携行食の便利さの氾濫は、従来、山岳宗教的・さみの登山や、大自然に対する人間の動物的な素朴な生活技術―雨巾での火起こし、小枝・草での小屋掛け、

南アルプス
と人間 (下)
山本 朋三郎

ナタ目の利用法、獣道の見分け法——は忘れられ、見すてられて、近代的な登山靴はワラジ、下タビの登山方法を置きざりにして、行った。美しい渓谷は見にくい自動車道が毒蜂のようにまつわり、山稜の野営地の池は近くで排泄される人糞がしみこんで、大腸菌の溜池となっていました。

三千m級の山頂も、ぐつと時間的に短縮され、高度順化と体力の練成のために必要である峠道も、車窓から眺めての通過地点となり、大自らの恐しさを、侮ることになるのも自覚しない登山者が激増して来ている。『登山者ばかりが大自然の美しさを専有すべきでない』との山岳観光の旗印と、これを後押しする観光資本の山への進出は、無定見になり易く、大自然の植物、土壌、生物、気象の調和を乱し、永い年月の間には回復不能の破壊を招来し兼ねないことに気付いていない。たとえ気付いても、観光資本の本来の性格からして、マイナスの性的支出は出ししづるのが定石である。広大な山野の一小部分の設備だから大丈夫であろうと、多寡をくくるが、一度調和を失った山野の回復は何百年も不能であるという。朝鮮の赤茶けたハゲ山の多いのを見ても判る。原日本人を構成した民族が生活していた頃の朝鮮は、緑に包まれた美しい半島であつたらう。指導標がないので登山が不便である。山小屋が小さく、食事付きでないので不便である。万一の時の逃道がない。これは南アルプス南部において全般的に言われることである。しかし、元来山には人為的なものは一切ないので有り前であり、出来るだけ人為的なものを作ったり置いたりしない方がよい。南アルプスは日本に残された最後の山々である、とよくいわれる。残されたその意味は、多くの場合、観光資本の進出が少ないという意味も含まれているようである。

る。ダム工事、林道開発という経済的な自然開発も、観光利用と紙一重の背中合わせが実状である。

南アルプスの、特に南部の山々の大半は営林署と東海パルプ、千頭木材、大昭和製紙の大手の所有地が大半を占めている。観光目的に南アルプスの山を開発するのが本来目的の所有者でないから、観光公害のおそれは少ない。

それぞれ伐採、植林を計画的に行なう企業体であるから、南アルプスをハゲ山にしてしまふ恐れはまずまず。しかしながら、原始林を伐採して特定種類の植林を行なうことによつて、森林界における輪廻のリズムが乱されることは防ぎようもない。伐採、植林による森林界の輪廻の変化は当然、動物界にも大きく影響して来る。さびに気象的な微妙な変化をも招来するであろう。からみ合うこれらの輪廻の変化は下界に住む人間と自然との調和にも影響をおよぼして来る。うるわしき南アルプスを永久に謳歌するためには多くの人たちが、あらゆるポジションにおいて、局部的な大開発、近視眼的利用を止め、大自然と人間との輪廻は如何にあるべきか、との見地に立って考えない限り不可能であろう。(完)

図書室便り (昭和47・12)

新刊図書受入報告

- 二見書房寄贈 (1) 安川茂雄著『単独行者の記憶』 昭和47
- 芙蓉書房寄贈 (1) 泉寛美子著『泉靖一と共に』 昭和47
- 築地書館寄贈 (1) 小林国夫著『日本アルプスの自然』 昭和47
- 筑摩書房寄贈 (1) 飯塚浩二著『満蒙紀行』 昭和47

信濃路寄贈 (1) 大町山岳博物館編『北アルプス博物館誌』 I 昭和47

文芸春秋寄贈 (1) 高橋照著『マナスル西壁』 昭和47
図書委員会購入 (1) 武田久吉著『登山と植物』 昭和45
定期刊行物受入報告

【部報・会報】

- (1) 長崎山岳会『あしあと』 (47-4), (47-5), (47-6), (47-7), (47-8), (47-9), (47-10), (47-11), (47-12)
- (2) 東京白樺会『白樺』 No. 227 (47-12)
- (3) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』 No. 67 (47-12)
- (4) 山の自然を考える会『会誌』 No. 14 (47-12)
- (5) 林野庁『国有林』 No. 3 (47-11), No. 4 (47-12)
- (6) 国立公園協会『国立公園』 No. 276 (47-11)
- (7) 京都山岳会『京都山岳』 No. 572 (47-12)
- (8) 東京管林局『みどり』 No. 9 (47-12)
- (9) 長野県山岳総合センター『所報』 No. 7 (47-12)
- (10) 尾瀬の自然を守る会『尾瀬ニュース』 No. 9 (47-12)
- (11) 東京野歩路会『山嶺』 No. 512 (47-12)
- (12) 日本自然保護協会『自然保護』 No. 125 (47-10)
- (13) 低い山を歩く会『低山』 No. 90 (47-12)
- (14) 日本山岳協会『登山月報』 No. 45 (47-12)
- (15) 日本登山協会『山々雪』 No. 176 (47-12)

【雑誌】

- (1) 『アル』 No. 178 (47-12), No. 179 (48-1)
- (2) 『岳』 No. 307 (48-1)

(3) 『山と溪谷』 No. 412 (48-1) (その他)
(1) 鹿児島大学山岳部『Resina lente』
(2) 日本観光文化研究所『AMKAS・資料目録アフリカ』
(3) 拓殖大学山岳部・岳友会『ピントマクシニョビラヤ遠征隊報告書』
(4) 日本学生カナダ登山隊『カナディアン・ロッキーズ登山隊報告書』
【新着海外雑誌】

- 1. "Alpinismus" '72-11.
- 2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 9, October '72.
- 3. "Der Bergsteiger", Jah. 39, November '72.
- 4. "The Geographical Journal" Vol. 138, Part 3, September '72.
- 5. "The Mountain Club of South Africa", No. 74, 71.
- 6. "Rivista mensile" Anno 93, N. 8, Agosto '72.

【新着海外雑誌】

武田満子氏寄贈 (1) 『大日本接壤三國之全図』
退会会員 七二〇 川口昭一
物故会員 一五五六 荒巻広政 昭和四七・一一 逝去
二八八六 三井松男 昭和四七・一一 逝去
訂正 会報三三〇号一頁物故会員諸岡一丈氏の逝去月日を昭和四七・一〇・二五と誤りと訂正。

ルーム日誌 (47年11月)

- 6日(月) 集会委員会
- 8日(水) 学生部委員会 会報編集委員会 自然保護委員会
- 9日(木) 青年懇談会 指導委員会
- 10日(金) 学生部委員会 山岳編集委員会
- 13日(月) 日・ネ協合理事会
- 14日(火) 図書委員会
- 15日(水) 学生部委員会
- 16日(木) エーデルワイスクラブ
- 21日(火) エーデルワイスクラブ
- 24日(金) 書評委員会
- 27日(月) 常務理事会
- 28日(火) 稲門山岳会
- 29日(水) エーデルワイスクラブ
- 30日(木) 学生部委員会
- 2日(土) 支部長会議 於京王プラザ
- 4日(月) 集会委員会 於京王プラザホテル
- 5日(火) 学生部委員会
- 6日(水) 会報編集委員会
- 11日(月) 理事評議員会

12日(火) 図書委員会 書評委員会

13日(水) 三井航空の集い

14日(木) 青年懇談会

18日(月) 学生部委員会

20日(水) 第二九一回小集会「忘年会」婦人懇談

会・集委員会

21日(木) 会報編集委員会

22日(金) 第二九二回小集会

一、ニュージールランド親善登山隊の記録(スライドと解説) 国鉄山の会

二、マナスル西壁八ミリ映画 高橋照氏製作

十二月中来室者 三五六名

第二八五回小集会報告 溪流つり集会是八

月二十二日、青年

懇談会の夏山合宿と重なったため参加者二十名と少人数ではありましたが、幸い快晴に恵まれ、夏の終わりを秋川溪谷でマスつりに興じました。水温が高く魚の喰いはもう一つというところ。最後に全員で川を堰止め、つり残したマスを浅瀬に追って手づかみにしましたが、この方は大いによろこばれ、老いも若きも久しぶりに童心にかえり楽しい一日でした。(小川武)

訂正 会報三二五号八頁図書紹介文中、理触とあるのは理解につき訂正、会報三三〇号四頁鳥海山の秋を味わう会文中、山装とあるのは山荘につき訂正、同号五頁小野岳の旅文中、小滝濱次郎とあるのは小滝清次郎の誤まりにつき訂正、同号六頁川喜田さんを偲ぶ文中、熊械岳とあるのは熊森岳の誤まりにつき訂正、同号一〇頁山研現況報告文中、申込みおとあるのはをにつき訂正、同号一〇頁会員移動とあるのは異動につき訂正おわびいたします。(編者)

昭和四十八年二月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三一二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 坂下 心一

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著
〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年
日本山岳会東海支部
〈B5判430頁・カラー64頁〉定価4,800円

山日記1973年版

日本山岳会編
〈A6判344頁〉定価850円

山岳

日本山岳会編
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
〈A5判〉 総索引 1,000円

国立公園カレンダー

国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

いろいろばた

南会津山の会
〈B24どり判320頁〉定価1,900円

シプトンの自叙伝

未踏の山河
大賀二郎・倉知敬訳
〈A5判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編
〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋進編
〈A5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

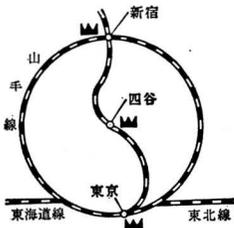
山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けどもし、どうも
要するものがある、
なにしろ人間ですから
かして、登山、ですか
どうしても必要なもの
をこらえたい
ま責任はもっています

かたるぐンテイ
でんや 281-8456
中央区八重洲4-11

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 34440

